

こどもの急な発熱



ヒトやその他の動物は、病原菌やウイルスに感染すると体温を高くして、菌やウイルスが増えるのを防ぎます。自分で体温を調節できない魚やハ虫類でさえ、暖かいところに移動して体温を上げます。つまり発熱は、病気から体を守る生体防御反応であり、むやみに悪者扱いするべきものではありません。でも放っておいて良いものばかりではありません。

《迅速な対応が必要な場合》①41℃を超える熱、②生後90日（3ヶ月）未満の赤ちゃんの38℃以上の熱、③意識障害（呼びかけても反応しない）を伴う熱、④心臓病や重度の貧血で心不全がある場合、⑤医師から特に注意されている神経疾患、糖尿病、先天性代謝異常がある場合、⑥熱中症（車中などの高温環境下やハードなスポーツが原因で体に熱がこもる）が疑われる高熱に対しては、夜間や休日であっても迅速な診断や治療が必要です。呼吸苦や嘔吐・下痢、腹痛、頭痛など熱以外の症状が重い場合にも、それぞれの症状に応じて対応が必要です。

《高熱は脳に障害を与えるのか？》41℃を超える体温は脳に障害を残す可能性があり、治療する必要があります。熱中症による40℃以上の体温は“熱射病”と呼ばれ、生命が危険な状態です。かぜや肺炎の熱は、生体防御のために自分で出している熱であり、なんらかの基礎疾患でもない限り、通常高熱による障害は起きません。しかし、熱を出している子どもを過剰に暖める、間違った看護の結果として熱射病を起こしてしまうことがありますから注意しましょう。

《高熱でひきつけないか》0-5歳の乳幼児の2-8%が発熱時にけいれん（熱性けいれん）を起こすことがあります。乳幼児の熱性けいれんは、それが本当に熱性けいれんである限り安全なものです。髄膜炎や脳炎あるいは慢性のてんかんなどが隠れていることがあるため、特に初めてのけいれんでは医師の診察を受けるべきです。なお、けいれんを起こす前から熱性けいれんを予測することはできませんし、解熱剤でけいれんを予防することもできません。

《解熱剤の使い方》解熱剤は、①必ず熱が下がるわけではない、②病気を治しているわけではないので数時間で効き目はなくなる、③自然な生体防御反応の邪魔をして病気の経過を長引かせる可能性がある、④病気本来のすがたを隠してしまい、医師の診断をむずかしくする、⑤胃腸症状や肝機能の障害、熱の下がり過ぎなどの副作用が起こることがある、などの短所を十分理解された上で、かつ医師の指示に従って使っている限りは危険なものではありません。

※家庭での看護のポイント※ ~~~~~

寒がっている時は暖かく、暑がっている時は涼しくしてあげましょう。水分摂取はできないよりできた方が良いですが、嘔吐や下痢がなければ初日からあまり神経質になる必要はありません。

佐世保中央病院小児科（2011年8月改訂）

